



いきなりH 瞳が合っただけで
欲情桃発即ハメ

大好評！期間限定
SS付きCG集同封

多○宮君、
いいから私に犯されなさい♡

魔女達が狙うは
ショタ主人公の包茎ち○ぽ♡

SABERFISH

基本イベントCG**20枚**+別アングルカットイン**20枚以上**大ボリューム

♡ インストール中...

いきなりH 瞳が合っただけで
欲情挑発即ハメ



いきなりH 瞳が合っただけで
欲情挑発即ハメ

「多華宮君、おっぱいが張り詰めて苦しいの。
ねえ、吸って……代わりに多華宮君の堅くて
大きなオチンチン、いっぱい気持ち良くしてあげるわ」

多華宮君のチ○コを優しく撫でながら、先端に
母乳が滲んでいるおっぱいを口元に突きつける。
手の中でビクンビクンと元気に脈動するチ○コの感触を
味わっていると、身体中が甘く疼いて、胸の奥から
幸せがこみ上げてくる。

ハァ♡

ハァ♡

ビクン

フリッ



「ほら……先っちょの皮、剥いてあげるわ。
もうトロトロに濡れているのね」
勃起の先端を包み込んだ包皮を優しくずり下げると、
きれいなバラ色の亀頭が剥き出しになる。

「ふわ！ あああ、火々里さん……気持ちいいよっ！」
敏感そうなワレメから、透明な男の子の愛液が
滲み出していて、凄く美味しそう……。



「はむ……んふ……ちゅばっ、ちゅばっ、れるっ……
ふあ、甘いミルクが出るよ……じゅばじゅばちゅうちゅうッ！」
多華宮君は、大好きなおっぱいを夢中になってこね回しながら、
乳首をぎゅぎゅ吸ってくれた。



♡♡♡
♡♡♡

「めはぁあん……そっ、そっ……もうっ……
もっと吸って多華宮くんっ！」
魂まで乳首から吸い取られてしまうような快感に
身を震わせながら、多華宮君のチ○コを愛撫してあげる。

チュクチュク

ぶっぶっ

「んぎゅふううんっ！出るっ、出るんふううんっ！」
乳首を啜えたまま、絶頂の声を上げた多華宮君のチ○コが
勢い良く射精して、白いドロドロを噴き上げた。

あぁっ！

「めはぁあ、私も……出るっ、ミルク……出るわ……」
力強く脈動するチ○コを握り締めながら、
私も母乳をいっぱい噴き出してアクメしてしまう。



にゅぶっ……ぬちゆるっ……。
エッチな音を立てながら、太腿の間から多華宮君のチ○コが顔を覗かせる。精液まみれで紅く充血して、ビクビク震えている。
「このまま太腿で搾ってあげましょうか？ それとも、私のマ○コに挿れたい？」
「挿れたいっ！ 火々里さんのマ○コに挿れたいよっ！」



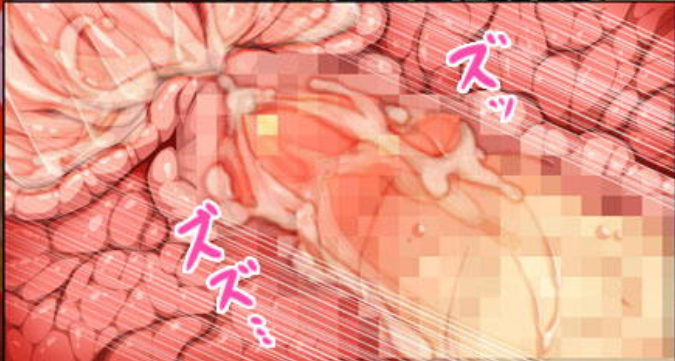
ずちゅずちゅぬちゅぬちゅ、パンパンパンパンパンパンッ！
多華宮君はすごい勢いでピストンを繰り返して、子宮を突き上げてくる。
「火々里さんッ！ ポク、もうイキそうだよッ！」
「いつ、いいわ……出してえ！ 中に……いつぱいッ！」
「ああああ、出てるっ、多華宮君の精液がいつぱい出てるわッ！」

パンパンパンッ

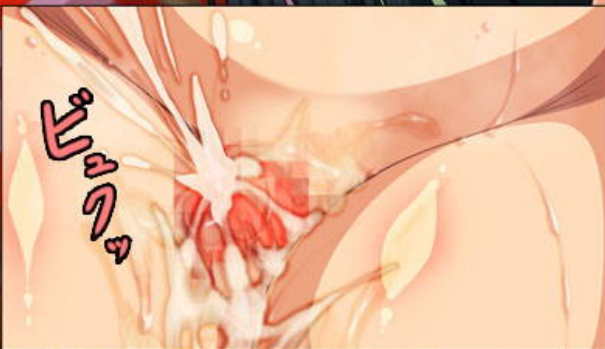
グズッ♡

アッ♡

あっ♡

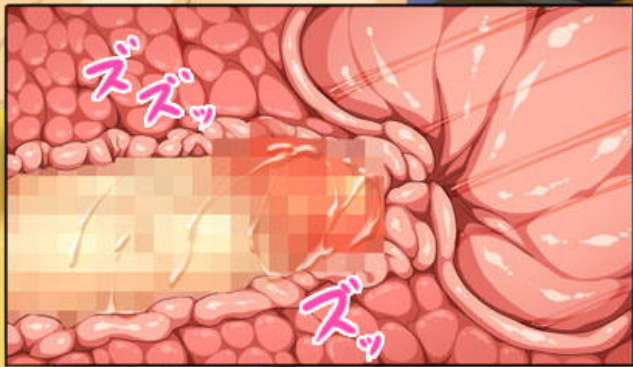


ちゅぽっ……ぬちゅんっ！ びゅぶるるるっ、ずびゅるるるっ、
びゅくびゅくびゅるるるるるッ！
勢い余って抜け落ちてしまった子○コが、太腿に挟まれたまま射精を続けている。
「んあ……まだ……出てるのね？ まるで私が射精しているみたいで、
不思議な感じ……」
射精中の子○コに密着しているマ○コに下クドクという脈動と、
精液の熱気が伝わってきて、気持ちいい……。

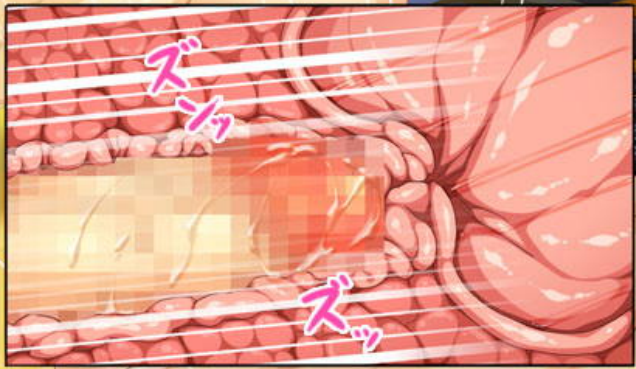




「ねえ、まだできるでしょう？ 来て……」
どうしようもなく身体が疼いている私は床に寝そべり、
自分でマ○コを割り開いて多華宮君を誘う。
「ほら、よく見て。おっぱいもマ○コも、
全部多華宮君が好きにしているのよ」
多華宮君を昂らせるエッチな言葉をかけながら、
挿入をおねだりしてマ○コをヒクつかせて見せる。



「うんッ！ 行くよッ！ くふうううう……火々里さんのマ○コに、ボクのチ○コが入っていく……んんっ！」
小さな身体が覆いかぶさってきて、私の中に熱く堅く、大きなチ○コがゆっくりと挿入されてくる。
「はあああ、多華宮君ッ！ 挿れられただけで、イッてしまえようよ……」
悦びで体が震え、マ○コがキュンッ、キュンッ、と勝手に収縮して肉柱を締め付けてしまう。



「んは、あふ、んっんっんっくううんっ！」
胸の谷間に顔を埋めた多華宮君は、小さな身体を躍動させて、
固いチ○コを突き挿れてくる。
「はウウツツ！ んあ、あんツ！ すっ、凄いつ、
多華宮君のが奥まで届いて……もう……もう、イキそうよッ！」
荒っぽく揉みこねられているおっぱいから母乳を
溢れ出させながら、私は絶頂へと飛翔してゆく。



「んあ……ハアハアハアハア……あ、はああん……」
ぶちゆるっ、びゆるっ、くちゅ……ぶちゅ……じゆるるっ……。
絶頂の余韻に震えるマ○コの奥から、卑猥な音を立てながら
中出しザーメンが溢れ出してくる。
「ボク、こんなにいっぱい、火々里さんの中で
出しちゃったんだ……」



「あふ、んむふううう、仄君のセーエキ、おいひい
じゆるるっ、んくんくん、ゴクンッ……」
「小町、私にももっとおすすそ分けてくださいよ……あむ……
ずじゆるるっ……んは、凄く濃くて、喉に絡みますね」

んせ

ロー♡

チクワ♡

ハマ…♡

「愛するかざねちゃんと一緒に、息子のセーエキ飲めるなんて夢みたいだわあ、
ちゅばっ……すちゅううっ！」

「ふわああ！ 母さんッ、そんなにきつく吸われたら、
また、出ちゃうよおお！」



「んふっ、多華宮君、もっといっぱい射精できるように、性感帯を開発してあげましょう……」「薄い胸板の上で、ピンツ、と可愛らしく尖った小さな乳首を愛撫してやると、多華宮君のシヨタホデイがビクビクと反応する。」



んふっ

ちゅっ……

レロ〜

ハッ……

ブルっ

ハッ……

「あはあ、かざねちゃん上手ねえ。わたしにもして欲しいなあ……あむあむじゅるじゅるるっ！」
「全くあなたって人は、どこまで淫乱なんですか？あとで母子揃って可愛がってあげますよ……」

「ふはあ、あはあ、今日もいっぱい、仄君のセーキ飲んじゃった♪
最近お肌もツヤツヤで、わたしまで若返ってきたみたいよ」
「多華宮君の濃い精液を、それだけ独り占めしていれば当然でしょう？
わたしの方は、おこぼればかり……じゅるるっ……」

「かざねちゃんったら、そんなにむくれないでよお、
仄君は絶倫だから、まだまだいっぱい射精できるわよ、ね？」



「うふあああ！ また、射精……しちゃうのうっ！」
びゅくびゅくびゅくすびゅくおろろっ……
びゅくびゅく、とびゅくおろろっ、とびゅくおろろっ……

「ほおら、出た出たあ。
仄君のオチンチンはほんとに元気ねえ、母さんうれしいわあ」

「おろろ……」
「きゅん♡」

「びゅん♡」

「ハア……」

「ハア……」

「ふっ……」

「ズクク……♡」

「二人がかりのバイズリ責め、まだまだこんなものではないですよ。
もっともつと搾り取ってあげます！」



「ごっ、ごめんなさいい！ また、また射精しちゃうよおお！」
どびゅどびゅどびゅるるるるるるおおろっ！
びゅくびゅくすびゅるるるるるるっ！！

「はああああん、凄いつ、凄いわあ仄君。
こんなにドロドロしたのをいっばい噴き上げて……
この青臭い匂い、好きよお」

「素晴らしい脈動ですね……まさに命のエキス……濃厚な精臭でむせ返りそうですよ」





「はぁぁぁ、いっぱい出たわねえ、
母さんのおっぱい、仄君のセーキでドロドロよお」

「フフツツ、あんなに出したのに、まだ固い……
本当に底なしの絶倫ですね。もっと責めてあげたくなくなってしまいますよ」

「そろそろまでよっ！
お二人ともッ！」

グ
グ
グ

はぁ…

ピ
ン

もが…

ピ
ン

っ
っ
っ

「んぐ、んぐ、んぐ、んふ……ちゅぱっじゅぱっすちゅめるっ……
はふ……れるれるれる……すじゅめるッ！」

「そうよお、その調子でいっぱい吸ってあげてね。
綾火ちゃんが仄君の子〇コ吸ってるところ見られるなんて、夢みたい」

んふ……
んふ……

ちゅぱっ
じゅぱっ

チゅるる……

んふ……

んふ……

「フフフツ、まさに淫夢のような光景ですね。
ほら、綾火、その程度の舌使いでは、多華宮君を満足させられませんよ！」

「んむっうー！ 母さんは黙っててください……
多華宮君の子〇コは、私のもれふ……ちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱッ！」



「くあ、ああああ、火々里さんっ！
そんなに先っばばかり舐めたら、ボク……もお……あッ、ああんッ！」

「ガマンなさい多華宮君。
限界まで堪えてから射精した方が、快感も大幅アップしますよ」

「そうよお、ウフフツ、
オチンチンがビクビク震えてるわ、もうすぐ射精しちゃうのねっ」

「んぶ……出してえ多華宮君、くちゅくちゅくちゅすじゅるるっ、
ちゅばちゅばちゅば、あむあむあむあむんっ！」



「さらなる快感を極めるために、サポートしてあげましょう、フフツ、乳首舐められるの、好きでしょうっ、びちゅっ」

「男の子なのにねえ……あむ、ぴちやぴちやぴちや……あはあ、ちっちゃな乳首がプルプル震えてるう」

「ふあああ、母さんまでえ！ あッ、あああんツ、乳首、コリコリ噛んじゃ、ダメええ！」



「びちゃびちゃびちゃびちゃ……ほら、多華宮君、抜かすの二発目、綾火の口に注ぎ込んでやってください」

「ちゅばッ……そのあとは、お母さんとかざねちゃんにもセーキいっぱい注入してねえッ」

ちゅばッ

びちゃッ

びちゃッ

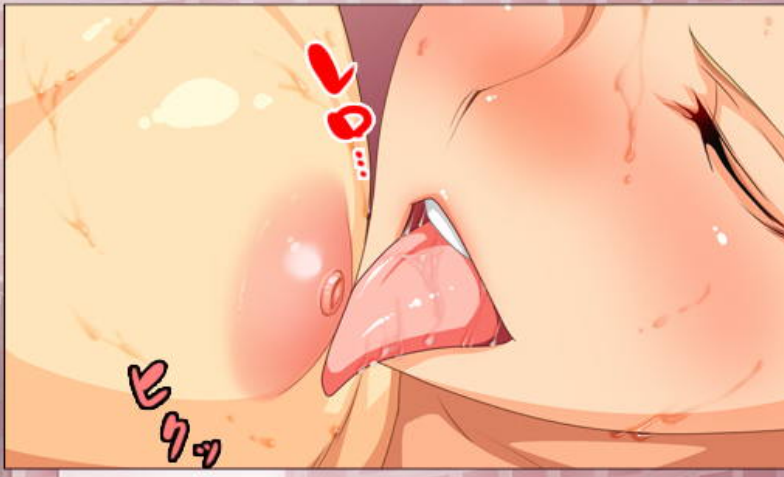
ちゅばッ

「そっ、そんな……もう許してよお、射精し過ぎて、ボク、もうヘトヘトだよお」

「ダメ！」

「男の子ならもっと頑張りなさい！」





「ふああ、勘弁してよお、昨日も一晩中
火々里さんたちに搾り取られて……はああう！」

「はい、たんぼぼちゃん居ないけど始めるぞお！」
「ぞー」
アタシらKMM団は、裸に剥いて風呂場に連れ込んだ
多華宮仄のシヨタチ〇コに群がっていく。

「乳首ちょっと舐めてあげただけでピンピンに
ホッキさせて、可愛い声出しているじゃないですか」
「ほらあ、キスしてやるよ。あむ、んふ、くちゅくちゅ」



「ほっ、ほらあ、ポケーッとしてないで、早く来いッ！」
「来て……」

重なり合ったアタイとカサリンは、おっきいチ○コが
プチ込まれるのを待ちわびてマ○コをヒクヒクさせている。

「二人交互にチ○コ突っ込んで十回ピストンしたら交代だからな！
あと、ふたりともイかせて、中出するまで休みなしたからなッ！」
「なっ……」





「はあああんっ！ また出るよおおー！」
どびゅっ、どびゅるめっ、どへたへっすびゅるるるるッー
「ふや……あああ……出て……る……んんんッー」
中出しアクメに震えるカザリンの痙攣が、おっぱい越しに
伝わってくる。

「んあ、はあはあはあ……よ、よおし……カザリンはイッたから、
今度はこっちだー！」
多華宮君のシヨタチ○コは、信じられないぐらい絶倫で、
KMM団のみんなはエッチするたびにメロメロにされてしまっ。



じゅぶらう……すりゆうつー！
「んはあああ、チ○コ入ってきたああ！ 動けっ、
思いつきりズコズコ動けええ！」
じゅぼっ、ずちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅるっ……。
アタイの要求に応じて、多華宮君は小さくなった身体を
躍動させて、マ○コを突き上げてくる。



ずちゅずちゅずちゅずちゅ、パンパンパンパンパンッ！
「はひひい！ 凄いつ、多華宮君、お前、凄いよおお！」
こんなちつちやい身体のどこにそんなパワーが
秘められているのか、多華宮君のチ○コは凄勢いで
マ○コを突きまくる。
「んほおおおお！ イグっ、イグうう、出せええ！
白いのっ、セーエキドブドブって出せよおおおろっ！」





「いつ、いいですね？ ルールはいつもと同じです。
多華宮君の肉刀で、私達二人から一本取るまでですよッ！」
「うんっ……じゃあ、行きますッ！ んは、あああ、
二人とも、もうトロトロ口になってて、チ○コ蕩けちゃいそうだよ」

「チ○コ蕩けさせるのは、マ○コを絶頂させてからだ！
はっ、はやくしろよッ！ その鬼エロいチ○コ、
ぶち込んでこいッ！」
挿入を急かされた仄のシヨタ巨根が、KMM団の
お姉さんキャラ二人の膣口に交互に突き立てられた。



「んあ、あッ、くふううんっ！ そんなに締め付けたら、ボク、もお……」
「泣き言は許しませんよッ！ もっと、もっと激しくッ、ふっ、深く突いて来なさいっ！」

あんっ♡

ズズ…

ビュッ♡

プン♡

♡♡♡

まるで剣道の練習のような声をかけながら、メガネ剣士、虎鉄はヒストン快感に溺れてゆく。

「はあはあはあはあ……また、こんなに
出ちゃった……」
「ああ、鬼大量に出された精液がマ○コから
ドブドブ溢れて……くうっっ!!
まだ、イキてりねえ」



大量中出しされた冥のマ○コは、アクメの余韻にヒクヒクと蠢き、
クリトリスも弾けそうなほど勃起してしまっている。
「なっ、なあ、もう一回、もう一回だけイカせろよ! な、いいだろ?」





「ボクも気持ちいいよっ! でっ、でも、他の人達は誘わなくていいの?」
KMM団の他のメンバーには悪いけど、美味しいモノは独り占め。」

「んはああ、多華宮君のチ○コ、
何度突っ込まれても気持ちいいッ!」
おマ○コの奥までズブズブ入ってくる
熱くて硬いシ○タ巨根の感触に、
甘く蕩けた声が出てしまう。」



びくっ♡

↑

↑

びくっ

ぱんぱんぱん

はちゅんばちゅんばちゅんつ、ぱんぱんぱんぱんつ！
「きゅふうふうふうんッ！ あひつ、ふおおお……
また、またイグふうふうふうんッ！」
絶倫多華宮君のピストンは、何度射精しても止まらない。
もうアクメすぎて、身体中ドロドロにされている。

(しくじったかもしれない。他のメンバーも
呼んでおくべきだったか……イキ過ぎて……辛い、
けど、またイクふうん！)



